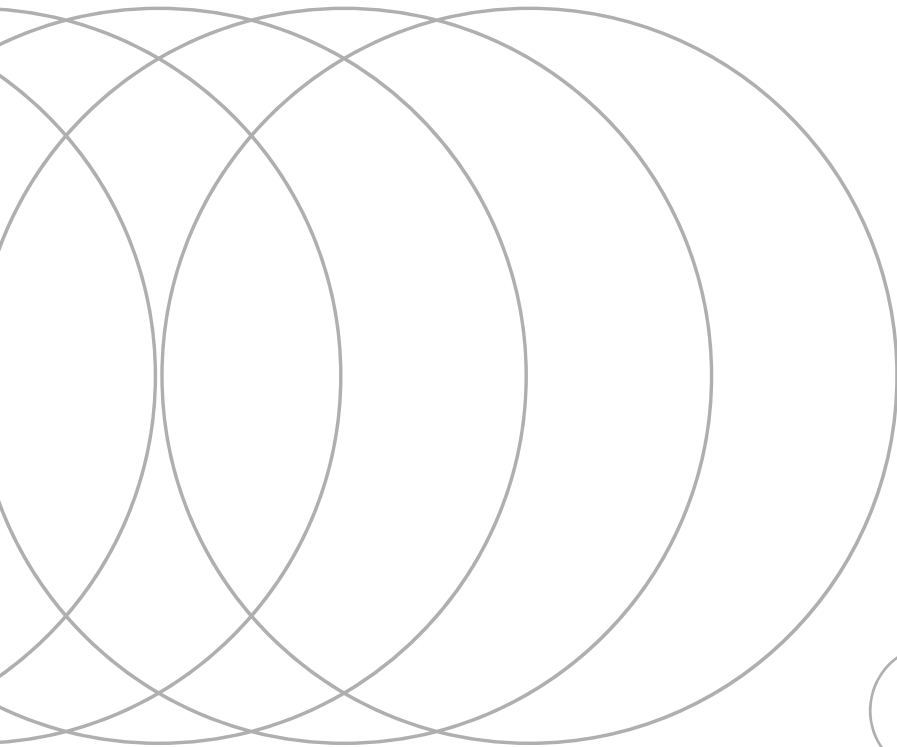


K A A I
H A S H I M O T O

ETERNO

L I S T E N E R S G U I D E

May "ETERNO" always be by your side.



<https://www.kaai-flute.com/>




TABLE OF CONTENTS

Introduction

1. Gabriel's Oboe

2. Aria

3. 永遠の花 (Flower Remembered)

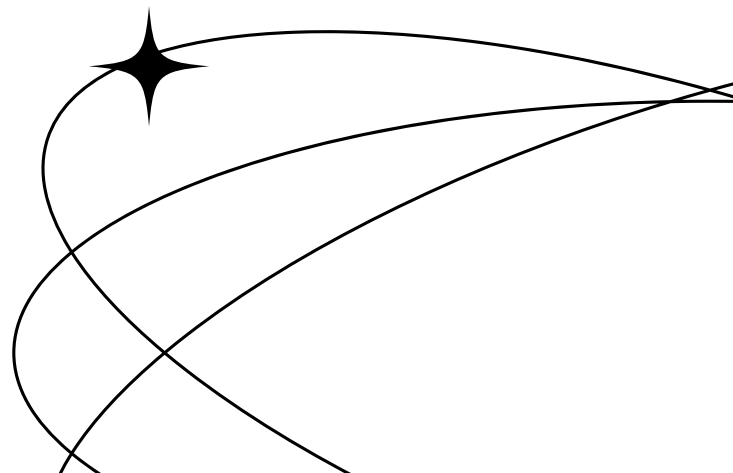
4. Years of Solitude

5. Oblivion

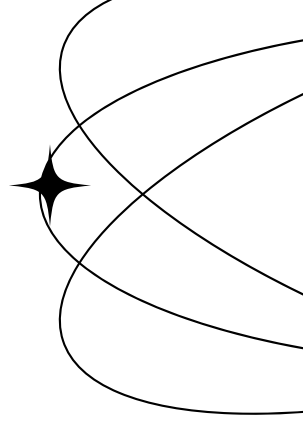
6. En Bateau

7. 明日への遺言

Thank You



ETERNO



それは「永遠」を意味する言葉・・・

人生には、消えていくものと、
時を超えてなお続いていくものがあります。

日々の出来事や感情、
記憶はいつか薄れていくかもしれません。

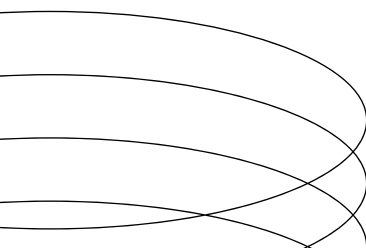
ですが、自然の息吹、
長い時間の中で受け継がれてきた思い、
育まれた文化は、消えることなく、
時代を超えて私たちの心に響いていきます。

音楽もまた、その一つ・・・

心に広がる海のように、
静かに、深く、時に波のように揺れながら、
そっとあなたに寄り添うでしょう。

たゆたう水の中で
忘れられていく記憶があっても
心の深い淵に静かに残るものがあり、
そこから未来への光が生まれてくる、
そんな祈りをこめて

このアルバム「ETERNO」が、
あなたの人生の旅の友になる、
そんな存在となりますように。



1. GABRIEL'S OBOE

ENNIO MORRICONE

映画『ミッション(1986年)』は、18世紀の南米を舞台に、イエズス会の神父ガブリエル神父(ロバート・デ・ニーロ)とフェルナンド神父(ジェレミー・アイアンズ)が、先住民の村を奴隷狩りから守るために奮闘します。

土着の文化と先住民の人権を守る闘いが信仰にまつわる倫理的な葛藤と共に描かれ、感動的な結末へと展開していきます。

「ガブリエルのオーボエ (Gabriel's Oboe)」は、映画の中で主人公ガブリエル神父が南米のジャングルでオーボエを演奏するシーンで使われており、その瞬間は映画の中でも特に印象的で象徴的な場面として知られています。

この曲を聴くと、心の奥底に深い静寂がゆっくりと広がり、やがて時は止まったかのような感覚に包まれます。

哀愁を帯びた旋律の響きのなか、私は演奏しながら自分自身が一瞬、この世の喧騒から解き放たれたように感じます。

この曲に身を委ねた時、響きと共に解き放たれた私の心は深い水底へ一度沈み、普遍の信仰や迷い、そして救いを見出そうとする気持ちに触れて、再び浮かび上がってきます。

空間に解き放たれる優雅な響きは、ただ美しいだけではなく、わたしたちを大切な内面の旅へと誘ってくれます。何かの導かれるように……。

2. ARIA

EUGENE BOZZA

フランス出身のボザ(1905年-1991年)は、指揮者や音楽教育者としても活躍した作曲家でした。

彼の作品は、フランスの音楽教育の伝統を受け継ぎつつ、技術的な挑戦と感情的な表現を兼ね備えています。また、フルートやクラリネット、サクソフォンなどの木管楽器のために多くの独奏曲や室内楽曲を作曲し、これらの楽器の音色と表現力を最大限引き出すことに成功しました。

「アリア (Aria)」は、彼が1936年に作曲した作品で、もともとはアルト・サクソフォンとピアノのために書かれました。しかし、その美しい旋律と表現力豊かな楽曲は、フルート、オーボエ、クラリネット、トランペット、トロンボーン、ファゴットなど、多くの楽器のために編曲され、今日まで引き継がれています。

この曲の音には、忘れられたいという静かな諦念と、忘れられたくないという渴望が、交互に現れてくるように感じます。

穏やかに流れる旋律は、まるで過去の記憶や存在が時間と共に薄れていく様子を描写しているかのようです。

そこには、消えていく自分自身を受け入れるかのような静けさもありながら、その一方で、「まだここにいる」「私を忘れないでほしい」と必死に訴えかけてくる瞬間を感じてはっとうします。

存在の儚さと、どこか記憶に留まりたいという人間の本能的な願望が、音楽によって繊細かつ大胆に表現されています。

3. 永遠の花

JOHN MILFORD RUTTER

ジョン・ミルフォード・ラターは イギリスの作曲家、編曲家、指揮者で、主に合唱の分野で活躍しています。

「永遠の花 (Flower Remembered)」は、東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方のために書き下ろされた合唱曲です。

被災地に思いを馳せ、自らの感情と祈りを込めて作曲された楽曲。

歌詞には、災害によって遠くに去ってしまった人々を「美しい花」にたとえ、「私たちはいつまでも忘れないよ」という深いメッセージが込められています。音に追悼の祈りを、優美で暖かみのある旋律に希望や再生の願いを、込めました。

思い出の花は永遠に咲き誇る

日の光のようにまぶしいばかりに

花香は漂う 静かに奏でる調べのように

優しい声は語る “あなたのそばにいつまでも”

幾千のささやきのこだまが聞こえる

時には遠くかすかに 時にはあざやかに

命の限りの響きでささやくように

“忘れないで 忘れないで 忘れないで”

雪で覆われ白く輝く峰をめざして

今や鳥たちは去り 雪は融けてしまった

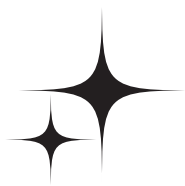
でも今も見える あの美しさ 遠く過ぎ去った風景

鳥たちは遠くの谷へと飛び立ち

雪は融けて 川となり

全てが過ぎ去っても 思い出はいついつまでも

“忘れない 忘れない 忘れない”



一つひとつの音が、消えることのない記憶や感情を優しく包み込み、やがて新しい命や希望へと繋がっていくように感じられます。

この曲を通じて、過去と未来が静かに交わり、記憶が永遠に生き続ける瞬間を共有できたらと思います。

4. YEARS OF SOLITUDE

ÁSTOR PANTALEÓN PIAZZOLLA

「孤独の歳月 (Years of Solitude)」は、ピアソラの「Nuevo Tango (新しいタンゴ)」スタイルを象徴する作品です。新しいタンゴは、従来のタンゴにクラシック音楽やジャズの要素を取り入れた、ゆったりとしたテンポで進む切ないメロディがあることが特徴となっています。

曲の流れはまるで、ゆっくりと過ぎていく刻のようで、静かで美しい旋律が聴く人の心に響きます。時折訪れる、ピアソラ特有のリズムや和音の変化によって感情の揺れが表現されています。

孤独とは何でしょうか。

わたしにとって、それは誰かと一緒にいる時でさえ、ふと感じる心の中の静かな響きのようなものです。

それは、人との関わりからくる寂しさではなく、むしろ自分自身の深い部分に触れるような感覚。孤独は、誰にも埋められないものであり、自分を知るための大切な贈り物。

その贈り物は私たちに新しい気づきを与えてくれます。

日々の感情や思いが積み重なり、その中で私は少しずつ成長していくのを感じます。その結果、新しい道が見えてくる瞬間が訪れるのです。

孤独を経験することで、人とのつながりの大切さや温かさを改めて感じるができるのかもしれませんが。

その時間は私たちに寄り添い、気づきと成長を支えてくれるものです。

そんな時にこの曲が、そっと付き添い、聴く人の心を優しく支えてくれることを願っています。



5. OBLIVION

ÁSTOR PANTALEÓN PIAZZOLLA

「オブリビオン (Oblivion)」は、アストル・ピアソラが1982年に作曲したタンゴ作品です。

この曲は映画『エンリコ4世』のサウンドトラックの一部として制作され、深い哀愁と静かな情熱が込められています。タイトルの「オブリビオン」は「忘却」を意味し、ゆっくりとしたメロディと和声の中に、失われた記憶や儂さを感じさせる独特の哀愁が表現されています。

忘却とは、心に刻まれた痛みを伴う記憶が、時間と共に少しずつ癒されるものなのではないでしょうか。

そして、優しい思い出に変わっていく瞬間、その記憶の重さも変わるように思え、わたしはそこに安らぎを感じます。

振り返ったとき、切なさがこみ上げることもあります。そこで気づくのは、過去の自分との別れでした。

この曲が皆さまにとって、自分の中で新たな一歩を踏み出すためのきっかけや、未来への希望を見つけられるようそっと背中を押す存在であってほしいと願っています。

音楽を通じて、過去と未来をつなぐ静かな時間を持ちながら、心の奥深くに響く何かに耳をすましていただけたら幸いです。



6. EN BATEAU

CLAUDE ACHILLE DEBUSSY

クロード・ドビュッシー(1862年-1918年)は、フランスの作曲家であり、印象主義音楽の先駆者として知られています。

19世紀末から20世紀初頭、フランスでは芸術の分野で、日本の文化を取り入れるジャポニズムなどの革新的な動きが盛んでした。

そのため、同時代の印象派の画家や象徴主義の詩人たちから影響を受けたことにより、彼の作品は伝統的な和声や形式から離れ、色彩豊かな響きと自由な表現が追求されています。

その結果、音楽で視覚的なイメージや繊細な感情を表現を試みた彼は、自身の独自の音楽言語を確立し、後の作曲家たちに大きな影響を与えました。

「小舟にて (En Bateau)」は、彼が1886年から1889年にかけて作曲した『小組曲 (Petite Suite)』の第1曲目です。この組曲は、もともとピアノ連弾(ピアノ四手)のために作曲され、後にアンリ・ビュッセール(Henri Büsser)によって管弦楽編曲されました。

この曲は、優雅で軽やかな印象主義的な作風で、ゆったりと水面を漂う小舟の動きを描いています。

そして、色彩豊かな和声や繊細なリズムは、自然の美しさや感情の微細な変化を生み出しています。

この曲を聴くと、まるで絵の中に迷い込んだような感覚になります。

音楽が織りなす繊細で色とりどりの美しい旋律は、静かな水面に浮かぶ小舟を思い起こさせ、まるで豊かな筆使いで描かれた絵画のようです。

そう感じながら演奏していると、自分が自然と一体になったかのように感じられ、心が解き放たれていきます。

静かで深い喜びが心に広がり、まるで特別な時間が自分だけに与えられたかのように、豊かで穏やかなひとときが訪れます。

7. 明日への遺言



加古 隆

加古 隆は、日本の現代作曲家であり、映画音楽やドラマ音楽、コンサートピースなど幅広いジャンルで活躍しており、彼の音楽は、聴く人々の心に深い感動をもたらすことで知られています。

「明日への遺言」は、2008年公開の同名の映画『明日への遺言』のために作曲されました。

この作品は、昭和23年の戦後日本を背景に、アメリカによって元東海軍司令官の岡田資中将がB級戦犯として裁かれる過程と最後の日々を描いています。戦争の傷跡を乗り越える人々の姿が描かれ、加古隆の音楽はそのテーマを深く支える重要な役割を果たしました。

柔らかな旋律と力強く劇的なパートが交互に現れ、聴く人に印象を与えるこの曲は、まるで過去の人々の想いや感情が、静かに私に語りかけてくるかのように思えます。

悲しみや喜びといった深い感情が曲の中に静かに脈打ち、そのすべてを受け継ぐかのような旋律が、心の奥深くに染み渡ってきます。

優しくも力強い旋律が、私の中に刻まれた過去の傷や痛みをそっと癒し、心に小さな希望の灯をともしてくれるかのように前へ進むための確かな力を与えてくれるのです。

私はこの曲を奏でながら、未来への希望と平和の願いが世代を超えて続いていくことを祈らずにはられません。

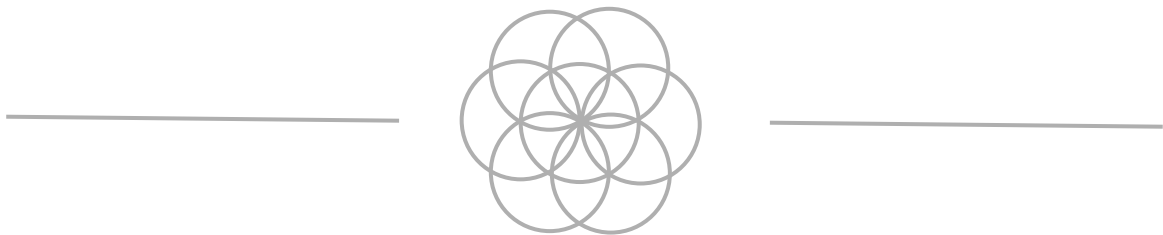
音楽が繋ぐこの想いが、どこまでも広がり、私たちの心に静かで確かな力を宿してくれることを願っています。

このアルバム「ETERNO」では、ラターの「永遠の花」と、ピアソラの「オブリビオン」を対になるように選びました。

どちらの曲も「忘却」と「再生」をテーマにしており、深く結びついていると感じます。「オブリビオン」は、喪失感や悲しみの中から新しい希望や再生の可能性を示し、過去の痛みを静かに手放し、新しい自分を見つけるきっかけを与えてくれます。一方、「永遠の花」は、過去の出来事や失われた人々の記憶を大切に抱きしめ、その想いを未来へと紡いでいく曲です。

過去の出来事や人々の想いに心を寄せながら、自分自身の中にある希望や願いを感じてみてください。

これらの曲の響きが、皆さまにとって優しい道しるべとなりますように。



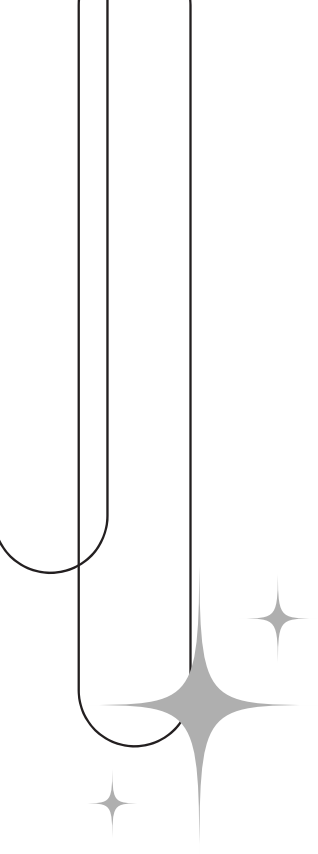
アルバム「ETERNO」を制作するにあたり、ご尽力いただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

多くの皆さまのおかげで、この作品を世に送り出すことができました。また、このCDを手にとってくださった皆さま、本当にありがとうございます。

皆さまの温かいご支援と共感が、音楽活動の大きな励みとなっています。音楽を通じて、皆さまの心に安らぎや希望、そして感動をお届けできれと願っています。

今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

橋本 可愛



THANK

YOU

